

P013

園生活への適応に関する研究(12)

○星 道子

福本 俊

福山 多江子

(日本女子大学)

(関東短期大学)

【問題】

「園生活への適応」に関するこれまでの一連の発表において、我々はしばしば「居場所」について言及して来た。園生活への適応とは、自分を取り巻く環境と折り合いをつけ、新しい関係を築き上げ続けることであろう。すると「居場所」とは、「環境と折り合いが付き、そこを根拠として新しい関係を築き上げ得る場や状況」と言えよう。そして環境とは、言うまでもなく、その中に人的並びに物的な要素を含み込んだものを指すが、これら人的並びに物的な要素同士は相互依存的な間柄にあると言える。例えば、一冊の絵本は、保育者のある意図によって取り上げられた時に、それは単なる「一冊の絵本」ではなく、受け取る子ども達への、生きる上での何らかのメッセージを担うものとなる。また、保育力を潜在的に備えた遊具や教材は、保育者に働きかけ、より豊かな保育行動へと誘うであろう。

ところで「居場所」について言えば、これは何も子ども達だけに関わるものではなく、保育者についても重要な要件であろう。”能(よ)く居場所を持ち得た保育者にして初めて、子ども達にも能(よ)く居場所を保障し得る”と言えるかもしれない。そして、保育者自らの「居場所」は、保育者同士、更には、保護者とのコミュニケーション、即ち、お互いのココロとコトバの通じ合いを通して、初めて能(よ)く創られるものなのであろう。(註1)

先程「居場所」の意味の件(くだり)で出て来た「折り合い」は、お互いのココロとコトバの通じ合いによって齎せられるものであり、またそれによってココロとコトバの通じ合いがなされるものである。これを子ども達に当てはめれば、「友達関係」となろうか。豊かな友達関係は、お互いのココロとコトバの通じ合いを通して創られ、その友達関係が、またお互いのココロとコトバを通じ合わせることになるのである。

かくして「居場所」と「友達関係」とは大きく重なることになる。園生活の中で、友達関係の占める位置は大変に大きい。子ども達は色々な思いを胸に登園してくるに違いない。「きのうの続きをやろう」と楽しみにしている場合も多いであろう。そのような時、「きのうの続き」はそのまま「きのうのお友達」をも

前提として含んでいるのであろう。遊び場所も遊具も文具も、それを巡る友達関係の中に摂り込まれたとき幾層倍にもその魅力を増すように見える。独りぼっちで待っていた原っぱに(以前は原っぱが東京にもありました)遊び仲間がやって来たとき、同じ原っぱが燦然と輝いて見えたと言うような経験は、誰にでもあるであろう。

友達関係については、次のようなエピソードがある。幼稚園からの帰途、「今日はお友達と一回も遊べなかったからすごく詰まらなかった」とポツリとY子。親が担任にその旨を話す。「今日はクラスの誰よりも一杯遊んでいた」と担任も不思議に思う。親が色々と聞いてみると「お目当ての友達」が風邪でお休みであった。他の友達とは一杯遊べたのだが、もう一つ満足が行かなかった。そのような気持ちの表現が「お友達と一回も遊べなかった」であった。特別な友達と一緒に遊ぶことがY子には、幼稚園へ通う大きな理由であった。

これらのことを考えると、そもそも「園生活への適応」の過程とは、その多くの側面においては、「友達関係の形成」の過程と言うことができそうである。そこで、園での友達関係の形成過程を明かにすることは、我々の研究主題にとって意義あることである。

〔註1〕学校教育における学級崩壊の原因の一つは、子ども達が持つ要求の多様性に、一人の教師では対応仕切れないという。至極当然のことに求められるであろう。であるならば、就学前教育では、1クラスにより多くの保育者(TAや実習生も含む)が必要であろう。保育に携わる大人同士の意思疎通の必要性はますます高まることであろう。この課題は別の研究に譲る。

【目的】

上記のことから、以下の4点を本研究の目的とする。

1. 「遊びたい」と思っている相手と「実際に遊んで」いる相手との一致状況を明かにする。
2. 「好きな相手」「遊びたい相手」についての、短期間における一貫性(安定性)を明かにする。
3. 何故「好き」なのか、その理由を明かにする。
4. 遊びにおいて成長の著しい対象児の、「好きな相手」「遊びたい相手」についての一貫性、「好き」な理由を明かにする。

【方法】

《子どもについての資料》

1. 子どもへの質問項目

「好きなお友達」「好きな理由」「一緒に遊びたいと思うお友達」について、書いたり言ったりしてもらう。

2. 保育者の保育記録（その日の各児の生活の記録）

これらの記録から、共同研究者（福本・福山）が、特に「友達関係」に絞って資料を抽出する。

3. 対象者：H幼稚園年中組及び年長組30名（男児10名、女児20名）。なお、これらの対象児は、年中組から年長組への持ち上がりクラスの子どもである。事例として、友達関係において2年間で特に変化の大きかったE子を、本報告では取り上げる

《調査等期日》

1. 子どもへの質問項目については、年中組の学年末（1999年3月）及び、年長組の後期（1999年12月と2000年1月）

2. 保育者の保育記録は、対象児たちを年中組から年長組に互って担当した、1998年4月から2000年1月までに該当するもの。

【結果・考察】

1. 好きな友達：一貫性と理由

1カ月間での一貫性を'99.12.7と'00.1.21のデータを元に整理したのが、表1である。更に、好きな理由の一覧が表2である。

表1：好きな友達の一貫性（1カ月間）

両時期で重なる友達の人数	0	1	2	3	4
該当する子どもの人数	2	2	3	4	3
両時期で重なる友達の人数	5	7	8	9	16
該当する子どもの人数	2	2	2	1	1

さすがに1カ月の間隔では、かなりの一貫性が推測される。16名というと女児の殆ど全てに当たる人数である。3名以上が一貫している子どもが15名である。回答していない子どももいることから、かなりの割合の子どもが幾人か友達に継続的な好意を感じている。

表2：好きな理由（'00.1.21）

理 由	子ども人数
A：優しい・静か	26
B：かわいい・奇麗・かっこいい	19
C：一緒に遊んでいるから	19
D：何かくれるから	4
E：なりたいものにならせてくれる	2
F：家での交流・長いつきあい	2
G：面白い・楽しい	8
H：あこがれ	3
I：その他	1

優しい、かわいい・かっこいい、一緒に遊び相手、面白いなどが、好きな理由の代表的なものである。

2. 遊びたい友達：一貫性と現実との一致性

遊びたい友達についての1年間と1カ月間での一貫性を示したものが表3である。（表中、該当児数（年）は、1年間を、該当児数（月）は1カ月間を示す）また、遊びたいと思っている友達と実際には遊べているのか、その一致度を示したものが表4である。

表3：遊びたい友達の一貫性

一貫した人数	0	1	2	3	4	5	6
該当児数（年）	2	8	6	1		2	
該当児数（月）	2	5	5	3	1	3	3

一貫した人数が3名以上になると、1カ月間の方が俄然人数が多くなる。一貫した人数が2名以内は1年間で16名が該当する。いわば核になった友達は1年間ずっと遊びたい対象であり続けていると言う事になる。

表4：希望と現実との一致性（'00.1.21）

遊べた友達数	0	1	2	3	4	6	8
該当児数	2	6	0	8	4	1	1

3名以上の希望通りの友達と実際に遊べた子どもの人数は、14名である。希望通りの友達の誰とも遊べなかった子どもが2名いる。クラスの殆どの子どもが何人かの希望する友達と遊べてはいる事が明かになった。

3. 事例－E子－

E子は、好きな友達の一貫性では、1カ月間は4名で、理由はC（一緒に遊んでいるから）であった。遊びたい友達の一貫性では、1カ月間は1名、1年間も1名で、これは同じ友達であった。ある1名を核に2年間の友達関係が展開して来たと考えられる。

E子の年中組での友達関係は次の通り。E子は他クラスの担任に支えられて年中組に移行して来る。関わろうとする保育者を拒む。そんなE子に他児が関心を寄せる。保育者は、他児にE子の世話役を頼みつつ、母親にE子と一対一で付き合ってもらえるように頼む。母親の絵を描くE子。手先の器用なE子に製作コーナーを用意する。E子からは大きな声も出て来る。保育者を基地に友達関係に加わり製作コーナーで先生役を果たす。4人グループができる。好きなカセットテープを中心に友達も増えて、自分から好きな友達の隣に行きたいと表明する。夏休み後、得意な製作を根拠に、他児との関わりを再開。初めは誘われていたが、自分のお気に入りの友達K子の隣に行くなど積極的な面も示す。K子を核として世界を広げて行く。この後暫く保育者の側で充電。得意な製作と友達関係との間を揺れながら、気持ちを出しながら友達を誘うE子がいる。